

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

渋沢敬三と民族学博物館

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 雅樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009307

渋沢敬三と民族学博物館

国立民族学博物館教授 近藤雅樹

(1) はじめに

代表の高田さんから、最初にお話をいただいたのは、約1年前だったと思います。みなさんがおつくりになった報告集を拝見しまして、非常によくお調べになった内容に驚きました。私と一緒にアチック・ミュージアムの同人たちの仕事やコレクションの中身を調べてくれている仲間たちの分も、ぜひ、ほしいと思って、十数冊を購入しました。それが、ご縁の始まりでした。

最初は、軽い気持ちでお引き受けしました。保谷は、日本の民族学の原点があった場所ですから、私自身、もう一度、訪ねてみたいと思っていました。

やがて、日も迫ってきたある日、今度は「民族学博物館の記念碑を建てます」というお便りをいただいたのです。もちろん、即座に「喜んで」と、お答えしました。ハイ。ところがです……。

数日前でした。今度は「記念碑の除幕式でごあいさつを」といわれまして……。

「これは、大変だ！」

早速、館長室に出向いて相談に乗ってもらいました。

すると、須藤館長は、「保谷は、われわれの博物館の母体があったところじゃないか。何としてでも駆け付けなと。でないと、ご先祖様に合わせる顔がないよ」と。

そこで、祝辞は館長にまかせておいて、私のほうは、招待者席の前列で、小さなデジタルカメラを片手に、キョロキョロしていました。

私たち、国立民族学博物館（みんぱく）のスタッフにとりましては、市民のみなさんの手でこのような立派な記念碑を建てていただいて、本当に、感謝にたえません。どうも、ありがとうございました。

(2) アチック・ミュージアム

本日の講演は、みなさんに楽しんでいただけそうな組み立てにしています。

スクリーンに映し出しているこの写真(15p左下)



講演会で

が渋沢邸です。いまは、青森県の三沢市内に移築されていますが、以前は、都内港区の三田綱町にありました。慶応大学の近くです。少年だった頃の渋沢敬三が、数人の友だちと一緒に研究活動を始めた場所は、最初は、渋沢邸内の、玄関脇にあった厩舎兼馬車庫の屋根裏部屋でした。その後、民俗学や水産史などの調査研究を本格的に進めるようになると、収集した資料や文献などを保管し、活動拠点とするための建物が、当然、必要になりますので、母屋のそばに木造2階建ての建物をつくりました。この写真でいいますと、向かって左側にその建物があったのです。

新築したアチック・ミュージアムの1階には、囲炉裏をきった集会室があり、ここで談論風発、ときには、遠来の同人たちが飲食付き無料で寝泊まりをしていくこともあったそうです。2階が民具の保管庫、そして、お魚が大好きだった敬三は、2階の南側のいちばん日当たりがよくて広い部屋に、熱帯魚を飼うための水槽を置いて、使用人や書生たちなどに、毎日、その世話をさせていました。のちには、その部屋も収蔵資料などでいっぱいになって、お日さまが見えなくなってしまったようなのですが……。そんな木造2階建ての建物から、保谷の民族学博物

館に資料が寄贈されたのです。

そのときの民族資料の数は、ほぼ1万点あまりと考えられています。そして、同人のなかの若い人たちを何人か選んで送り込み、資料の整理、また国内外での調査研究に、活動資金を提供し、大勢の研究者を育てていったのです。

保谷の民族学博物館のことは、民族学者のなかで、誰ひとり知らない者がいない。そういう意味で、ここは、記念の地です。で、たくさんの資料と一緒に送られたアチック・ミュージアムの同人のなかで、いちばん活躍したのが宮本馨太郎でした。まだ立教大学の予科の学生だった頃から、おとうさんの宮本勢助、この方は、服飾史の方面などで高名な先生でしたが、そのおとうさんと一緒に、アチック・ミュージアムに出入りするようになりました。やがて、遠からずして、渋沢敬三にその能力を高く評価されて、いろいろな場面で重宝される存在になっていきます。台湾に派遣されたり、アイヌ調査に出かけたりと……。

宮本馨太郎は、映像技術にも長けていたので、探訪の際には、よく敬三愛用の16ミリカメラを預けられました。民族学博物館の維持が困難になって、資料を国に寄贈すると決まったときも、最後まで尽くされました。後には、文化庁の前身である文化財保護委員会の委員となられ、民俗文化財を担当されました。

文化財保護委員会では、アチック・ミュージアムが作成した『蒐集物目安』や、その後、さらに整備された『民具蒐集調査要目』に示された民俗資料の分類、つまり、衣食住や生業などという分類ですね、それを、文化財保護行政のなかで定着させるという、地味ですが、後の世に対して非常に有益な仕事をさ

れました。これは、現在も民俗資料の分類基準として、文化庁による指導のもと、多くの歴史民俗博物館などで採用されています。本日、この会場に、ご子息の宮本瑞夫さんがお見えになっておられます。当時のおとうさんのご苦労を身近で見ておられましたし、保谷の博物館でも、お手伝いでいろいろとお仕事をなさったそうです。

(3) まぎれこんだ「モノ」

アチック・ミュージアムに集められていた何万点という民具が、保谷に運ばれてきました。そして、あるものは民族学博物館の展示資料となり、あるものは収蔵庫に配架されて、1939(昭和14)年の開館に大きく寄与しました。しかし、じつは、保谷には届かなかった資料も若干あったのです。同人の何人かが、たとえば出講先の大学などで「民俗資料とはこんなものだ」と説明するために、サンプルとして持ち出すようなことがあったのかもしれませんが、それは、保谷から文部省史料館を経て、大阪の国立民族学博物館に届いてなければならなかったはずの資料なのです。でも、届いていない。他所の機関でその所在が確認されている資料も少なくありません。

さらに、文部省史料館には、もう一つ別の資料群が寄贈されました。実業史博物館建設のために収集されていたものです。これも、渋沢敬三がつくろうとしていた博物館のために集められた資料です。これらは、古道具商から購入する際に、敬三が自ら品選びをしていたということです。実業史博物館は、竣工したものの、戦禍により頓挫してしまいました。現在、それらは、立川市に移転した国文学資料館の所蔵になっています。そして、本来なら大阪のほうにきていなければならない資料が交じっていました。たとえば、豪華な染付の「万祝着(マイワイギ)」です。これは、漁師たちの晴着で、大漁祝などに着ます。保存状態もすばらしい、非常に貴重なものです。でも、登録済みなので、今さら管理替えるのは、手続きがややこしくて困ります。

逆に、われわれの側にあってはならない資料というものも、紛れ込んでおりました。その一例が、宮本記念財団の登録票が結びつけられていた「足半草履」です。最近、未登録の資料の調査カードを点検していて、4足あることに気がつきました。宮本瑞夫先生にうかがいますと、まだ十数点あるはずだということでしたので、もっとよく探してみなければ



移築後の渋沢邸(講演資料のスライドショーから)

いけません。国立民族学博物館に管理替えされてから30年以上たちましたが、まだ半分近くは整理が終わっていませんので、そのなかから、これから、いろいろと不思議な資料が出てくるのだろうなあと思っています。

保谷の民族学博物館には、管理人として、家族ぐるみで住み込んでいた人たちもいました。その人たちが普段に使っていた生活用品、つまり、博物館の資料じゃないものも紛れ込んでいます。唐木夫妻に赤ん坊が生まれたときに入手したという記録と照合できそうな藍染の蚊帳は、状態のよいまま、継ぎの風呂敷に包んだ状態で残っていました。私物は、他にも、学生証など、さまざまなものが紛れ込んでいます。それらを見ていると、戦中戦後の、本当に大変な時期に、わずかな人手で、必死な思いで資料を整理し、寄付にこぎつけたのだなと、わかります。

大阪万博跡地に国立の民族学博物館ができるときも、これらの資料は移し替えられました。大きな移動をするたびに、資料の点検と登録には、どうしても、瑕疵^{かし}がついてまわるものなので、それを完全に防ぎきることは、できないのです。急いでいるときは、なおさらです。

今、私たちは、それらの有無を、保谷時代の資料台帳と照合して、1点ごとに、くりかえし確かめながら、登録に向けて整理を進めているところです。

徐々に全体像がはっきりしてきてはいます。こちらの標本資料として登録した当時にも、単純な入力ミスがあったり、人名などを読み違えていたり、資料の取り違えがあったりということも、わかってきました。でも、まあ、まだ、だんだんと……ですかね。もとのに復元しようと、私たちは、これまで10年ぐらいかけて見直しをやっているところです。

先ほど、渋沢雅英さんから、敬三没後50周年の記念事業に関するお話がありました。そのときまでには、なんとか、もっとはっきりと、アチックおよび保谷の博物館の、どちらも、かつての全体像を少しでも多くあきらかにして、みなさんの前に公開できるようにしてまいりたいと思っています。

(4) つくり、はぐくむ

渋沢敬三が設立に関与した博物館の数々のなかで、最初に結実したのが、保谷の民族学博物館でした。そして、それは、日本で最初の野外博物館でもありました。現在、大阪の豊中市にある日本民家集

落博物館が、ホームページで「日本最初の野外博物館です」とうたっていますが、実は、それは間違いなのです。間違いなのですが、その開設当初には、例によって、渋沢敬三がずいぶん支援したのです。

敬三は、公職追放が解ける頃から、研究活動も、財界での活動も、活発化させますが、もう「渋沢財閥」といわれた当時ほどの財力はありません。それでも、敬三恩顧の財界人たち、研究者たちが、ずいぶん大勢いて、その人たちの協力もあって、その博物館も実現をみました。最初は、合掌造りの移築民家1棟だけでしたが、今は14~15棟くらいにまで増えました。渋沢敬三という人は、博物館の礎^{いしづ}をつくることに、生涯、惜しみなく労力と資金を奉げ続けた、そういう人でした。

民族学博物館と実業史博物館の建設は、『渋沢栄一伝記資料集』の刊行と並行して進められていました。伝記資料は、文字や図表などで表す印刷記録であるのに対して、民族学博物館と実業史博物館は、それぞれ実物の標本資料、実際の商業資料・産業資料を網羅してビジュアルに訴えかけることに主眼がおかれていました。そして、これら二つの博物館構想のうち、一方は、いわば手弁当で部分公開をはたしました。他方、龍門社の事業として竣工までこぎつけたものの、戦況の悪化で中断を余儀なくされた実業史博物館は、幻の博物館です。さらに、もう一つ、敬三がつくりたいと願っていた博物館がありました。延喜式博物館です。

これは「延喜式」をもとに、なかでも水産物に関する記録を中心に、古代日本の生活文化を復元してみたいと、敬三が心のなかで温めていたものでした。でも、亡くなるまで、ついに具体的な形になるものがほとんど何もないままに、見果てぬ夢となりました。

民族学博物館がそうであったように、また、実業史博物館の再興がはかられているように、延喜式博物館も、今後、どなたかが、敬三の夢を継ごうとされるかもしれません。博物館というものをとても大切に思い、その重大さを強く認識していました。渋沢敬三とは、そういう方でした。では、博物館に対する強い思い、深い理解は、どのようにして芽生えてきたのでしょうか。

一つには、生物学者を夢見ていたお魚大好き少年だった頃からの夢、その夢をかなえるための具体的な姿の表れが博物館だったのでしょう。私は、そう

思っております。そして、博物館という存在が強く意識されたのも、旧制中学校時代の、友だち数人を集めて「博物館ごっこ」を楽しんでいた時代です。それが、アチック・ミュージアムと名づけたささやかな空間でした。渋沢敬三の博物館建設に懸ける思いの出発点でした。

仙台にいた二高時代と、横浜正金銀行ロンドン支店への赴任中は、アチック・ミュージアムの活動は中断しますが、敬三にとっては、赴任中のヨーロッパ諸国歴訪と、スエズ運河を通過してロンドンに赴任するまでの寄航地、アメリカ大陸を横断して帰国する途中と、行く先々でさまざまな異文化、異なる生活環境と習慣に接することができる、恵まれた時期でした。多くの博物館・美術館にも、精神的に出かけています。なかでも、強烈な印象を受けたのは、ストックホルムにあるスカンセンでした。1891(明治24)年につくられた世界初の野外博物館です。ここには、スウェーデン各地のさまざまな民家と、官公庁などに使われていた建物などが移築されています。そこで、今から200~300年くらい昔、つまり、18世紀頃の生活を再現展示しているのです。屋内外に大勢のスタッフがいて、当時の人たちの装束を身につけて、当時の生活を再現している。私たち見物人は、それこそタイムスリップした感覚になる、そういう博物館でした。

そんなスカンセンのガイドマップと、とてもよく似た図を、今和次郎が描き残しています。強く薦められたからでしょうか、敬三より数年遅れて、彼もスカンセンを訪ねています。だから、彼が描いた図には、並々ならぬ臨場感があります。

ヨーロッパの野外博物館は、基本的に、移築した



スウェーデン、世界最初の野外博物館スカンセン 糸紡ぎ



オランダ、ジューミュージアム 洗濯工房

建物と、その時代のファッションを、セットで示してくれているので、きわめてわかりやすく、子どもたちも楽しめる展示になっています。ヤギ、ヒツジなども放し飼いにしていますし、農地を再現して、実際に農作業をしている所もあります。町のパン屋さんや、靴屋さん、帽子屋さんもあれば、洗濯工場では洗い終わったシーツを中庭の芝生の上にひろげて干かしていたり、漁村では刺網を繕っていたりもします。



オランダ、ジューミュージアム 木挽き家具職人

このように、ヨーロッパには、往年の生活を再現している屋外博物館がたくさんありますが、スカンセンは、あきらかに、渋沢敬三が構想していた民族学博物館のモデルでした。

ちなみに、世界最初の民族学博物館といわれるのは、オランダのライデンにある国立民族学博物館です。ここは、シーボルト・コレクションをベースにしている、なぜか、日本の歴史の教科書にシーボルトだけが大きく紹介されているためでもあるのですが、今でもライデンの博物館といえば、シーボ

ルト・コレクションだと、多くの人たちがそういうイメージを抱いて見学に出かけますし、また調べにも行きます。

実際には、シーボルト・コレクションに匹敵するくらいの、出島のオランダ商館長たちによってつくられたコレクションの一部なども、この博物館には収蔵されていますし、いろいろあるのですけれどね。

敬三は、ライデンの博物館にも出かけていったかなと思ったのですが、まだ、私にてがかりはありません。アムステルダムには、行っています。

(5) 資料台帳を読む

帰国後の敬三は、アチック・ミュージアムの同人たちとともに、本格的な収集活動を始めます。最初につくられた資料台帳は『おもちゃ箱原簿』と名づけられています。その冒頭に登録された資料名は、1925（大正14）年で「猿」とあります。あの頃の郷土玩具研究の風潮に沿った研究サークルとでもいうような趣をもってスタートしたからです。

現在、その所在が確認できる『おもちゃ箱原簿』は、2冊です。その1冊目の中表紙に、初期の同人10名の氏名が記されています。2冊目も同じような体裁で、こちらは1928（昭和3）年から始まっています。

自分たちの玩具研究を指導してもらおうと、当時の名だたる収集者たち、研究者たちを招いて、勉強会なども開いていました。たとえば、有坂与太郎。この方のコレクションがたくさん寄付されています。

余談になりますが、この『おもちゃ箱原簿』にみえている同人の田中薫は、神戸大学で教鞭をとることになって関西に赴任されたのですが、奥様が田中千代さん。服飾デザイン学院の院長さんだったのですが、世界の服飾コレクションが、わたしどもの博物館に寄付されました。収集資料を介して、お二人が「みんぱく」で再会されたのは、何かのご縁かとの思いもあります。

保谷の民族学博物館では、あらたに用意した資料台帳に、まず『おもちゃ箱原簿』の登録順に転記していきました。保谷時代の資料台帳は、連番で16冊が残っています。国に寄贈することになったときに、宮本馨太郎を中心に、何度も何度も点検し、数え直して、行方不明になっている資料についてもできるだけ捜してと、ずいぶん苦勞していました。16冊の台帳を繰れば繰るほど、こんなに並々ならぬ努

力があつたのかと、そのことが伝わってくるのです。

神奈川大学日本常民文化研究所は、アチック・ミュージアムの後身です。その研究所が所蔵しているこれらの台帳をすべてお借りしてきて、複写したことがあります。もちろん、ご許可をいただいていることです。そして、未登録資料だけでなく、登録済みの資料も含めて、もう一度、内容を確認している最中なのです。すると、先ほどお話ししましたように、ずいぶん齟齬があるのだということが、あきらかになってきたのです。こういうことは、恥ずかしいことなのですが、コレクションというものは、移動すればするほど、やはり、どうしても、こうしたトラブルをひき起こしやすいのです。アチック・ミュージアムのコレクションも、保谷へ、戸越へ、吹田へと、何度も引っ越しを重ねてきました。その移動にともなう点検を経るごとに、なんらか、どこかが、おかしくなっている。記述を比べてみますと、わかってきます。

アチック・ミュージアムの活動の初期、玩具研究をめざしていた頃の収集資料には、やたらと「猿」がたくさん登録されています。それはなぜかといいますと、第1回会合以来、採集原票のスタイルを定め、台帳も用意して、本格的に収集に乗り出そうとしたときに、彼らは「何を集めるのがよいのだろうか」とも議論しました。そして、決めたのが「全員の手支にちなんだ玩具を集めよう」ということだったのです。敬三は申年でしたが、仲間が東大の同級生だったり、二高時代の同級生だったり、同年代だから申年生まれが重なったのです。

アチック・ミュージアムの最初の収蔵資料のうち、今も残って資料として、いちばん若い番号があるのも「猿」です。二高時代の親友中山正則が1921（大正10）年に収集したものです。その前の「ぬいぐるみ」2点も「さる」です。ただ、これら2点には「所在不明」のスタンプが押しあてられています。国への寄贈に先立つ点検で、見つけだせなかった資料の一部です。なかには、ネズミにかじられてしまった資料もあつたそうです。

保谷時代の台帳は、最後は35,000番台で終わっているのですが、途中、番号が飛んでいるところがあつたりして……。というのは、初期には毎年1,000点をメドに収集する考えでいたようなのです。最初は、目標の1,000点に達しないときは、翌年度は2,000番から始めるということだったらしくて、欠

番がたくさんあるのです。これには、ずいぶん悩まされました。今も、また別の理由による欠番に泣かされていますが……。

何度も台帳を繰ってみて、そういう登録の仕方でも理解できるようになりますと、この番号は、アチック・ミュージアムのもので、保谷でも引き継がれた番号だとか、文部省史料館に移すときに新たにカウントされた番号だとか、徐々にわかるようになってきました。一方、一つの資料に、いくつか異なる番号が付されていることもあります。それは、何回も、何回も、確認し直し、照合し直して、正しい番号へ近づけていくための、血のにじむ思いの作業だったのだらうと思います。そういうことを、3万点ほどの資料に対してやっていたわけです。

しかし、そうしていただいたおかげで、現在の「みんなく」の常設展示に役立てることが可能になったのですし、収蔵している資料についても、各地の博物館の展覧会などでも活用していただけるように、下地を整えることができます。ただ、まだ私たちの努力が足りなくて、完全に整理するには、もうちょっと時間がかかるだろうというのが実情です。

(6)「高橋」「文太郎」を検索する

最後に、高橋文太郎の収集資料をみてみましょう。「高橋」「文太郎」という姓と名を組み合わせ確認できた、つまり、ヒットした資料についてです。

画像データベースでは、54点を確認できます。それとは別に、保谷当時の台帳との照合、資料に直接付けられている採集カード、これは、正方形の荷札のようなかたちをしています。そういうものから探し当てた資料数は、全部で56点でした。ただし、問題があります。

保谷の頃の台帳と照合しながら整理してみたのが、お手元の一覧表です。保谷時代の台帳でカウントしてみると、未登録資料のなかから検出できそうな資料も少なくないことがわかります。まだ誰の収集かわからない資料の多さを慮ると、高橋の収集した資料は、もう少し点数が増える可能性は高いかもしれません。保谷時代の台帳に、高橋文太郎の収集として載っていた資料は73点でした。

さらに、学芸会の高田さんが中心になって整理されたものが2枚目の表です。三者を比べてみると、ずいぶん「揺れ」があります。これは、私の整理作業が芳しく進んではいない、データベースが未成熟

だからということもありますが、あきらかにおかしいというものもあります。「東印度(ジャワ)」とする「笠」は、その一例です。高橋文太郎が、ジャワから、なぜ笠1点だけを収集してきたのか。記入の段階で、資料を取り違えたのだと思います。

保谷時代に使用されていた台帳の収蔵番号と合致するものを見いだせない資料が、未登録資料のなかに残っている可能性もあります。文太郎の収集として確認した73点の資料に限っても、データ整理にかかわるトラブルがいろいろ起こっています。だから整理に困難をきわめているのです。

当然の話ですが、博物館のデータは身分証のようなものです。それを整理する仕事が、いかに慎重でなければならないか。そのことを、資料整理を通じて感じております。

みなさんの「高橋文太郎の軌跡を学ぶ会」の、今後の活動が楽しみです。私たちも、少しでもお役に立てることがあつたらお手伝いさせていただきます。

きょうは、どうもありがとうございました。

(文中写真・筆者撮影)

——プロフィール——

近藤雅樹 (こんどう まさき)

1951年東京都生まれ。1977年武蔵野美術大学造形学部美術学科卒。修徳高等学校美術科講師、(財)日本常民文化研究所嘱託研究員、兵庫県教育委員会事務局社会教育・文化財課県立博物館設立準備室技術職員、兵庫県立歴史博物館技術職員・学芸員、兵庫県立歴史博物館主任・学芸員を歴任。1990年より国立民族学博物館。現在、民族文化研究部教授。総合大学院大学文化科学研究科教授(併任)。

単著 『ぐうたらテクノロジー—熱烈!明治・大正「特許」事情—』(河出書房新社 1997)、『靈感少女論』(河出書房新社 1997)、『おんな紋—血縁のフォークロー—』(河出書房新社 1995)

共著 『日本の現代伝説—魔女の伝言板』(白水社 1995)

編著書他 『二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容 8—日用品の二〇世紀—』(ドメス出版 2003)、『図説大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム—』(河出書房新社 2001)、『ねがい・うらない・おまじない—欲望の造形』(監修・淡交社 2000)、『大妖怪展』(総監修・朝日新聞社 2000)、『図説日本の妖怪』(河出書房新社 1990)など。

国立民族学博物館所蔵 高橋文太郎収集資料

国立民族学博物館「標本資料詳細情報データベース(館内専用)」より抽出

2009年11月8日(配布資料 1/3)

標本番号	標本名	使用地	旧番号
<u>H0015009</u>	竹筒(奉納用)	東京府 北多摩郡	2049
<u>H0015010</u>	柿縫ぐるみ(奉納用)	東京府 板橋区 石神井	2050
<u>H0015238</u>	削り懸け	群馬県 群馬郡 伊香保町	2256
<u>H0015239</u>	幣串(奉納用)	東京都 北多摩郡	2257
<u>H0015240</u>	猿と柿(奉納用)	東京都 北多摩郡	2258
<u>H0015248</u>	布片(奉納用)	東京都 北多摩郡 村山村	2262
<u>H0015260</u>	標(カンジキ)	岐阜県 吉城郡 上宝村	2274
<u>H0015486</u>	粟穂稗穂(削り懸け)	東京都 北多摩郡 保谷町	2491
<u>H0016010</u>	背負具(セオイグ)	鹿児島県 肝属郡 内之浦町	3038
<u>H0016011</u>	弓矢(奉納用)	鹿児島県 肝属郡 内之浦町 大字 小田	3041
	アテキ		3611
<u>H0016431</u>	草履(ゾウリ)	岐阜県 大野郡 高山町	3612
<u>H0016432</u>	下駄(竹製)	岐阜県 大野郡 高山町	3613
	シルジャクシ	岐阜県 大野郡 高山町	3614
<u>H0016433</u>	杓子	岐阜県 大野郡 高山町	3615
	スキー(玩具)	岐阜県 大野郡 高山町	3616
	草鞋	岐阜県 大野郡 高山町	3617
<u>H0016434</u>	田下駄	岐阜県 大野郡 高山町	3618
<u>H0016435</u>	飯籠(アジカ)	岐阜県 大野郡 高山町	3619
	飯籠(二升アジカ)	岐阜県 大野郡 高山町	3620
<u>H0016436</u>	掘り棒	岐阜県 大野郡 高山町	3621
<u>H0016437</u>	銭籠	岐阜県 大野郡 高山町	3622
<u>H0016438</u>	腰巾	岐阜県 大野郡 高山町	3623
<u>H0016439</u>	* 籠(背負用, 竹製)	岐阜県 大野郡 高山町	3624
<u>H0016440</u>	* 籠(背負用, 竹製)	岐阜県 大野郡 高山町	3625
<u>H0016441</u>	*	岐阜県 大野郡 高山町	3626
	輪標(採集者名なし)	岐阜県 大野郡 高山町	3627
<u>H0016442</u>	腰巾(葡萄皮製)	岐阜県 大野郡 高山町	3628
	ウミゴ(キビズアテ)	岐阜県 大野郡 高山町	3629

2009年11月8日(配布資料 2/3)

標本番号	標本名	使用地	旧番号
<u>H0016443</u>	爪掛 (藁製)	岐阜県 大野郡 高山町	3630
	ツマゴ	岐阜県 大野郡 高山町	3631
	ウソ (ゴンゾーワラジ)	岐阜県 大野郡 高山町	3632
<u>H0016444</u>	帽 (籐皮製, 鉈用)	岐阜県 大野郡 高山町	3633
<u>H0016445</u>	蓑 (少年用)	岐阜県 大野郡 高山町	3634
<u>H0016448</u> *	袋 (背負用, 竹製)	岐阜県 高山市 日本人	3639
<u>H0017861</u>	杵 (葦製)	秋田県 仙北郡 桧木内村 大字 上桧木内 字 寺村	6099
<u>H0017862</u>	手袋 (画像なし)	秋田県 仙北郡 桧木内村 大字 上桧木内 字 寺村	6100
<u>H0017863</u>	山袴	秋田県 北秋田郡 荒瀬村 字 根子	6101
<u>H0017864</u>	足半草履	秋田県 北秋田郡 荒瀬村 字 根子	6102
<u>H0017865</u>	銭袋	秋田県 北秋田郡 荒瀬村 字 根子	6103
<u>H0017866</u>	波り物	秋田県 北秋田郡 荒瀬村 字 根子	6104
<u>H0017867</u>	腰巾 (藁製)	秋田県 北秋田郡 荒瀬村 字 根子	6105
	ハクチョウ (けものの皮)	秋田県 仙北郡 桧木内村 大字 上桧木内 字 寺村	6106
<u>H0017868</u>	餅 (信仰用)	秋田県 仙北郡 桧木内村 大字 上桧木内 字 寺村	6107
<u>H0017891</u>	う	秋田県	6122
	手提げ行灯 (ロクカク)	新潟県 西頸城郡 小瀧村 小瀧	10034
	角型行灯	埼玉県 入間郡 吾妻村	11997
		重複登録につき抹消 →	20750
<u>H0021870</u>	笠	東印度 ジャワ (インドネシア共和国)	12034
<u>H0024366</u>	婚礼用馬鞍 (購入)	山形県 南村山郡 金井村 黒沢	12133
		重複登録につき抹消 →	20708
<u>H0023863</u>	藁沓	新潟県 西頸城郡 小瀧村 大字 大所	20239
<u>H0023864</u>	行舟	新潟県 西頸城郡 小瀧村 大字 大所	20240
<u>H0023865</u>	蚊遣	新潟県 西頸城郡 小瀧村 大字 大所	20241
<u>H0023866</u>	籠 (竹製)	新潟県 西頸城郡 小瀧村 大字 大所	20242

2009年11月8日(配布資料 3/3)

標本番号	標本名	使用地	旧番号
	魚嚇 ウ	秋田県 仙北郡 桧木内村大字 上桧木内 字 寺村	20243
<u>H0023867</u>	斧	新潟県 西頸城郡 小瀧村 大字 木地屋	20244
<u>H0023868</u>	木地(椀)	新潟県 西頸城郡 小瀧村 大字 木地屋	20245
<u>H0023869</u>	木地(椀)	新潟県 西頸城郡 小瀧村 大字 木地屋	20246
<u>H0023870</u>	木地(盃)	福島県 耶麻郡 奥川村 大字 飯根 字 弥平四郎	20248
<u>H0023871</u>	木地(蓋付汁椀)	福島県 耶麻郡 奥川村 大字 飯根 字 弥平四郎	20248
<u>H0023873</u>	木地(蓋付汁椀)	福島県 耶麻郡 奥川村 大字 飯根 字 弥平四郎	20249
<u>H0024402</u>	笠(菅製)	新潟県 北蒲原郡 赤谷村	20741
<u>H0024403</u>	笠(菅製)	新潟県 北蒲原郡 赤谷村	20742
<u>H0024404</u>	笠(饅頭形)	秋田県 由利郡 上笹子村	20743
<u>H0024405</u>	笠(饅頭形)	秋田県 由利郡 上笹子村	20744
<u>H0024406</u>	蓑帽子	秋田県 由利郡 上笹子村	20745
	ケラ	秋田県 由利郡 上笹子村	20746
<u>H0024407</u>	提灯(籠製)	秋田県 雄勝郡 西馬内町	20747
	稲刈鎌	秋田県 雄勝郡 西馬内町	20748
	鋤鎌(イネカリガマ)	秋田県 由利郡 上笹子村	20749
	角行灯	埼玉県 入間郡 吾妻	20750
<u>H0024408</u>	下駄	鹿児島県 鹿児島市	20751
<u>H0024409</u>	下駄	鹿児島県 鹿児島市	20752
<u>H0024410</u>	下駄	鹿児島県 鹿児島市	20753
登録 56 点			73 点

↓ 印は未登録資料

高橋文太郎 収集民具一覽 (表4-3)

アテックミュージアム所蔵目録による					国立民族学博物館所蔵目録による		
登録番号	民具名	収集地	収集日	右表NO	NO	標本番号	標本名
3611	アテキ				1	H15009	奉納用竹筒
12	竹草履(バンバン)						使用地は 東京都北多摩郡久留米村
13	竹下駄				2	H15010	奉納用 織いぐるみ(柿)
14	シルジャクシ						使用地は 東京都板橋区石神井
15	メシジャクシ			12	3	H15238	削り掛け
16	スキジャクシ	岐阜県 高山	S9.2				使用地は 群馬県群馬郡伊香保町
17	草鞋	"	"	10	4	H12530	奉納用幣串
18	田下駄	"	"	13			使用地は 東京都北多摩郡
19	飯 籠	"	"	14	5	H15240	奉納用 織いぐるみ(柿)
3620	飯 籠	"	"	14			使用地は 東京都北多摩郡
21	稲クジリ	"	"	15	6	H15248	奉納用 布切れ
22	ゼニカゴ	"	"	16			使用地は 東京都北多摩郡村山村
23	脚 絆	"	"	17	7	H15260	かんじぎ
24	オネカゴ	"	"				使用地は 岐阜県古城郡上宝村
25	ヒラゴーザ	"	"		8	H15486	削り掛け(粟穂神種)
26	マルゴーザ	"	"				使用地は 東京都北多摩郡保谷町
27	輪 標(氏名空欄)	"	"		9	H16010	背負い運搬具(シカタ)
28	腰 巾	"	"	721			鹿児島県肝属郡内之浦町
29	ウゴミ	"	"		*10	H16431	草履
3630	ツマゴ	"	"	722	11	H16432	下駄
31	ツマゴ	"	"	722			岐阜県大野郡高山町
32	ウソ	"	"		*12	H16433	飯用 杓子
33	麻皮陀輪	"	"	23	*13	H16434	田下駄
34	簀	"	"	24	*14	H16435	飯籠
6099	カワタビ	秋田県 仙北郡松木内	S11.3.9	26	*15	H16436	盛り棒
6100	テウエ	"	"	27	*16	H16437	鉢籠
101	ハカマ	" 荒瀬	"	28	*17	H16438	脚絆(はばき)
102	アシダ(ナ)カ	"	"	29	*18	H16439	運搬具(背負い籠)
103	ゼンブクロ	"	"	3.7	*19	H16440	運搬具(背負い籠)
104	フロシキ	"	"	3.9	20	H16441	標本名は空欄、使用地は岐阜県高山町
105	ハンパキ	"	"	3.9	*21	H16442	脚絆(はばき)
106	ハクチョウ	" 松木内	"	3.7	*22	H16443	履物用爪掛け
107	カネモチ	"	"	3.7	*23	H16444	蛇用餅
6122	ウ	"	S? 3.27	33	*24	H16445	男子用蓑
10034	手提行灯	新潟県 西頸城郡小滝村小滝	S13. 9	30	25	H16448	運搬具(背負い籠) 使用地は岐阜県高山町
11997	角形行灯	埼玉県 入間郡吾妻村	S13.5		*26	H17861	靴
12133	飾礼用馬鞍(購入)	山形県 南村山郡金井村黒沢	S13.7.18		*27	H17862	手袋
20,239	蓑 靴	新潟県 西頸城郡小滝村大所	S13. 9	35	*28	H17863	仕事着(山袴)
240	ロツカク(六角)	"	"		*29	H17864	足半草履
241	襦 し	"	"	37	30	H17866	被り物
242	竹 籠 ビク	"	"		38	H17867	脚絆(はばき)
243	魚 刺し ウ	秋田県 仙北郡松木内	S11. 3		*32	H17868	信仰用餅
244	チョーナ ナカキリ	新潟県 頸城郡小滝村木地屋	S13. 8	39	*33	H17869	糧物(ウ)
245	木地(筒)ナカクリ	"	"	40	34	H21870	笠 使用地は空欄
246	木地(筒)ナカクリ	"	"	41	*35	H23863	蓑沓
247	木地(釜)アラガク	福島県 耶麻郡奥川	S12.10	42	*36	H23864	行灯
248	木地(蓋付汁椀)ナカホリ	"	"	43	*37	H23865	蚊遣り具
249	木地(蓋付汁椀) ソコホリ	"	"	44	*38	H23866	籠
20741	菅 笠	新潟県 北蒲原郡赤谷	S12.3	45	*39	H23867	手斧
742	菅 笠	"	"	46	*40	H23868	汁椀(制作途中)
743	鍔頭笠サクラドメ	秋田県 由利郡上笹子	S14.5	47	*41	H23869	汁椀(制作途中)
744	鍔頭笠バウロガサ	"	"	48	*42	H23870	汁椀(制作途中)
745	菅帽子ミノボッチ	"	"	49	*43	H23871	汁椀(制作途中)(蓋付き)
746	ケラ	"	"	50	*44	H23873	汁椀(制作途中)(蓋付き)
747	電提灯カゴチョーテン	秋田県 雄勝郡西馬内	"		*45	H24402	笠
748	鎌イネカリガマ	"	"		*46	H24403	笠
749	鍔 籠	秋田県 由利郡上笹子	"		*47	H24404	笠
20750	角行燈	埼玉県 入間郡吾妻	S13.5		*48	H24405	笠
751	ヒツタイ下駄	鹿児島在	S11	51	*49	H24406	蓑帽子(雨、雪用)
752	ヒツタイ下駄	"	?	?	*50	H24407	提灯
753	ヒツタイ下駄	"	?	?	*51	H24408	下駄
					*52	H24409	下駄
					*53	H24410	下駄

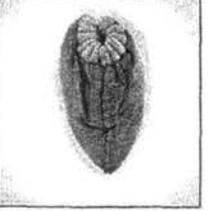
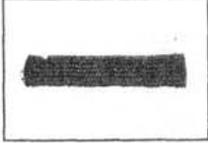
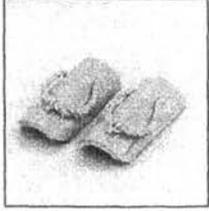
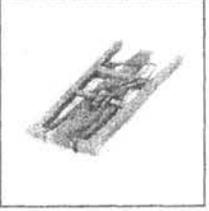
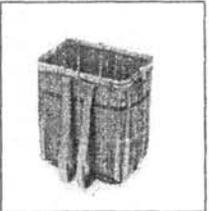
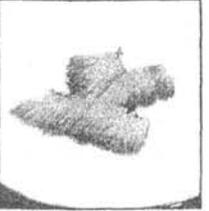
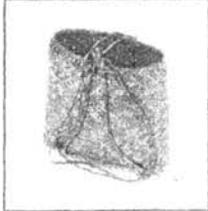
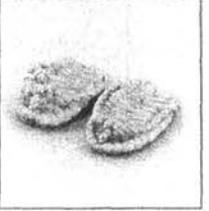
使用地：左欄収集地と同じものは省略。
 登録日：すべて昭和50年12月1日。
 *印の番号のものは左表にあり。

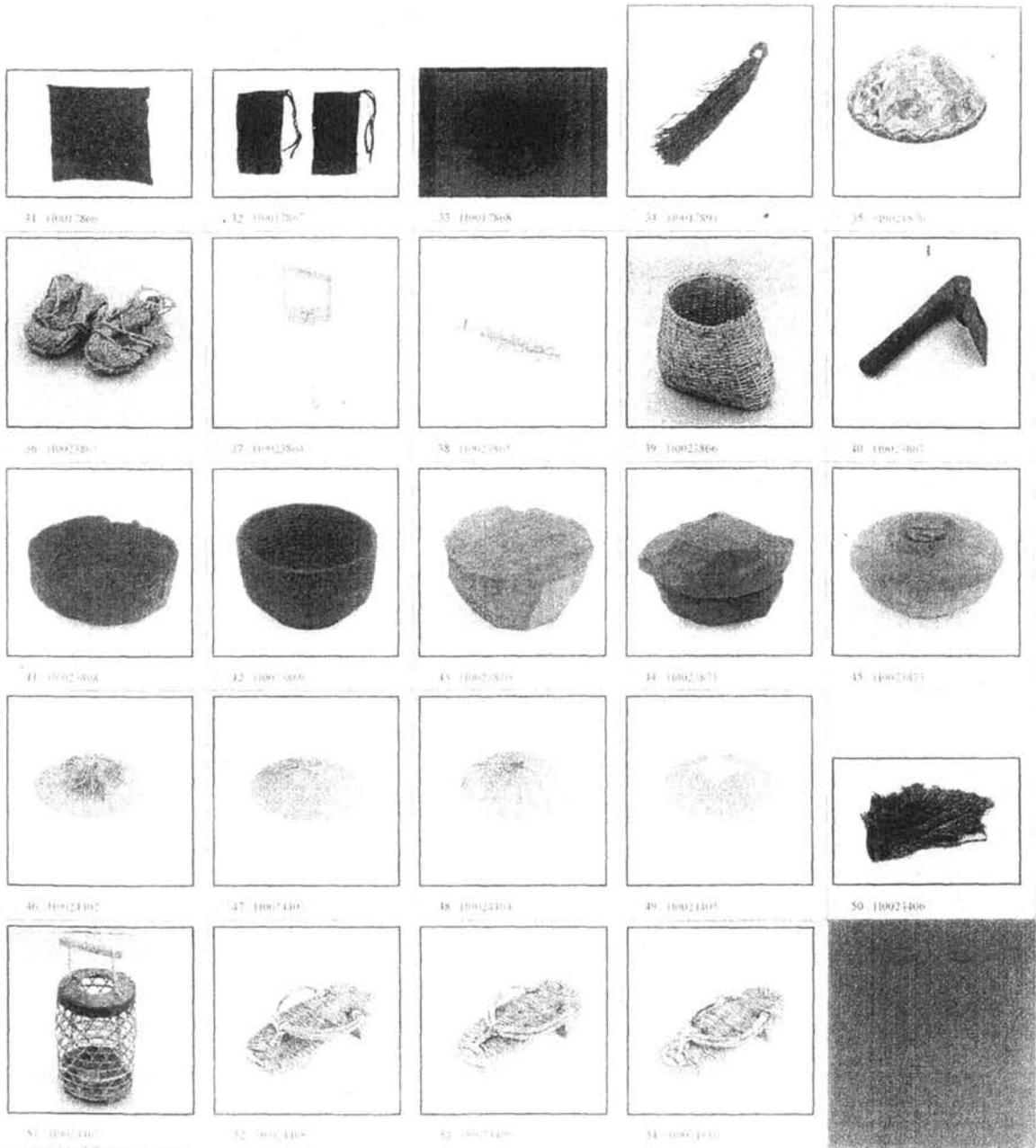
InfoLib 標本資料詳細情報データベース(暫定版、館内限定) 簡略画面

表示順 昇順 指定順L 表示件数 100
 Excel内改行(LF)に要換 CSV形式 ダウンロード

チェックしたデータのみ | 通常一覧 |

画像一覧

				
1 H001500	2 H0015016	3 H0015258	4 H0015259	5 H0015240
				
6 H0015248	7 H0015260	8 H0015386	9 H0016010	10 H0016011
				
11 H0016371	12 H0016372	13 H0016373	14 H0016374	15 H0016375
				
16 H0016386	17 H0016377	18 H0016438	19 H0016439	20 H0016440
				
21 H0016441	22 H0016442	23 H0016443	24 H0016444	25 H0016445
				
26 H0016448	27 H0016449	28 H0016450	29 H0016451	30 H0016452



チェックしたデータのみ

〔連続一覧〕